

## プラトン哲学におけるソーマの原理的特性

木庭 康樹

**The fundamental characters of *soma* in Plato's philosophy**

Kohki Kiniwa

**Abstract**

An attempt was made to clarify Plato's view of *soma* by considering the fundamental characteristics of *soma* in Plato's philosophy. The concept of *soma* had extensive ramifications in classical Greek, denoting not only the human body but also the elemental bodies (fire, water, air, earth), the corpse, the cosmic body, the celestial body, the animal body and so on, and Plato's view of the human body also included many background factors. According to *Laws*, one of Plato's later works, *soma* had three common characteristics: spaciality, movability and sensibility, and it took on an aspect different from the present-day concept of the body. Firstly, the spaciality of *soma* is the likeness of Form, which is copied into *chora* (the place of plenum), and it is a solid, which is geometrically formed by following Form. Secondly, the movability of *soma* is originally motion by others or disorderly and dotted linear motion, which is necessarily caused by accidental collision between particles; however, in connection with Soul and Reason, it becomes autonomous and orderly circular motion. Thirdly, the sensibility of *soma* is *pathema* (accidental affection), which is based on multiplicity in the geometrical structures of particles. *Pathema* injures Soul and *soma* when it is left to Chance and Ignorance, but in the control of Reason it contributes to the realization of good and the restoration of order. Since *soma*, which has close connections to Soul, Reason and Form, is represented as such a subordinate and necessarily conditional existence in Plato's philosophy, the human body, which is also called *soma*, should be considered on the basis of the above-mentioned fundamental characteristics.

**Key words : *Laws*, solid, motion by others, *pathema*****(Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 48: 555-572, September, 2003)**

キーワード：『法律』、立体、他動、パターマ

## はじめに

プラトンは『クラテュロス』や『ゴルギアス』において「身体は墓である σῶμα σῆμα」とし、人間にとって本来の生とは、死後、心魂が身体から解放されることにあるとしている<sup>注1)</sup>。つまり不死なる心魂は、生成消滅する身体からは独立した神的な実体であるが、反対に様々な情念や欲望を惹き起す人間の身体は、いわば心魂にとっての牢獄なのである。このようなプラトンの身体に対する否定的評価は、後の西洋思想に決定的な影響力を持つことになったのであり、さらにはギュムナスティケー論<sup>注2)</sup>にとっても文字通り手枷足枷となってきたように思われる。

たとえば、これまでなされてきた Zeller (1889) や Vlastos (1939), Brochard (1912) などの研究は、あくまで物体論が中心であるし、さらにこれらの知見をふまえた上で身体論が展開されることも、ほとんどなかったと言ってよいだろう。とくにプラトン研究では Cherniss (1954) の論文に代表されるように、人間の身体は悪の問題とともに論じられ、何らかの負荷価値を付与されることが多いのである。

しかしながら、近年、プラトン研究にあっては、かれの身体論を再評価し、人間の身体を考察の対象とするものも、若干ではあるが、見られるようになってきている<sup>注3)</sup>。同じく筆者も、別の機会において、上のようなプラトンの価値階層論を維持しながら、かれの身体論を明らかにする方法について述べており、それと同時にプラトンのギュムナスティケー論にも一つの方向性を見定めつつあると言える<sup>注4)</sup>。

とくに、プラトンの場合「ソーマ σῶμα」という語は、ほとんどすべての著作において言及され、人間の身体のみならず、生命の失われた死体や動物のからだ、天球や天体、さらにはそれらを構成する単純物体（元素）までをも含む非常に大きな外延をもっている<sup>注5)</sup>。またこれらの対象がすべてソーマと言われるのである以上、プラトン自身

にも何かそれらに共通する観念が存在していたはずである。

しかし、現代においては、ソーマと等しい外延を持つような語は存在せず、プラトンの言う身体（ソーマ）も、ごく限られた意味においてしか理解されないように思われる。というのも現代の自然科学的な世界像における、無機質で、無目的で、没価値的な物質の捉え方は、等質的な空間における物の局在化や実体化、さらには物それ自体における変化や知覚像の成立を前提としており、われわれ現代人の身体観も、このようなデカルト主義的もしくは唯物論的な考え方の強い影響下にあると考えられるからである。

そこで、本研究の目的は、あらゆるソーマに共通する原理的な特性を明らかにし、現代の側からではなく、プラトンの側から身体論を語りうる地平を切り拓くことにあると言える。おそらく、このような地平は、各種ソーマの総合的な把握をもたらすとともに、現代において硬直した身体観を柔軟にし、拡張することになるような可能性を内在させていると考えられる。またソーマの原理的特性を把握することで、あらゆるソーマの成立原因が明らかにされ、さらには同じ原理的規定のもとにある人間の身体に、ギュムナスティケーに関わり得る根拠を見出すということも可能とってくるだろう。

なお、考察の手順としては、まず、プラトンの最晩年の著作である『法律』からソーマの用例をいくつか取り上げ（Ⅰ.『法律』におけるソーマ）、つぎに、それらに共通する原理的特性をそれぞれ、主にプラトンの後期作品を通して分析していくことにする（Ⅱ. ソーマの空間性、Ⅲ. ソーマの運動性、Ⅳ. ソーマの感覚性）。というのも『法律』は全十二巻の大著であり、このプラトンの最終作品にはかれが最晩年において到達した哲学理論のすべてが凝縮されているのであって、我が国におけるプラトン研究の大家である田中美知太郎も、『法律』を終点からの出発として、プラトン哲学の基準におく方法論を展開しているからである（田中, 1981, pp. 8-11）。またこの『法律』には、立体や感覚媒体といった特殊なものを除き、ソ-

マの用例がほとんどすべての種類にわたって見られることから、田中のように『法律』を出発点とすることは、ソーマ論を展開する上でも十分に方法論的な意義を持つと考えられる。

## Ⅰ 『法律』におけるソーマ

『法律』という作品自体は、クレタ島を舞台にして、アテナイからの客人ら三人が新たに植民地として建設されるマグネシアという国家のために、国制や法律についての具体的な草案を行うという内容になっているが、そこでは、人間のからだ（ソーマ）についても、幼児の身体育成（*Lg.* VII 788D-789D）や自然環境による人体への影響（*Lg.* V 797C-D）、死体の埋葬法（*Lg.* XII 958D-E）など、まさに「揺りかごから墓場まで」論じられているのである。

とくに、『法律』第十卷では、無神論的な自然学説への反駁として、心魂の方がすべてのソーマよりも先にあることが証明され、各種ソーマの類概念である「もの」としてソーマが、心魂との鋭い対比によって次のように語られている。

アテナイからの客人では、〔心魂の〕気質、性格、意欲、計算、真なる判断、配慮、記憶といったものは、「もの（ソーマ）」の長さ、幅、奥行き、力よりも先にあったものということになるでしょう、もしも心魂の方が「もの（ソーマ）」よりも先にあったとすればですよ。

クレイニアス そうならざるをえません（プラトン、1976a, *Lg.* X 896C-D）<sup>6)</sup>。

つまり、ここからは、心魂に属する様々な精神作用に比して、ソーマに属する空間的な性質が挙げられていることがわかる。またこの箇所少し後においては、上のような精神作用のすべてが心魂の「第一次的な運動」として総括され、他方、ソーマの運動もそれに付随する感覚的諸性質を含めて「第二次的な運動」と呼ばれているのである。

アテナイからの客人……では、心魂は、天や地

や海にあるものすべてを、自分自身のもつ運動によって導いているのですね。つまり、それらの運動には、意欲、考察、配慮、計画、正しい判断や間違った判断、悦びや苦しみ、大胆や恐れ、憎しみや愛という名前がつけられているのですが、そういった運動や、またこれらと同類のものか、あるいは第一次的な運動であるものすべてによって、心魂は万物を導いているわけです。そして、これらの運動は、今度は、「もの（ソーマ）」のもつ第二次的な運動を自分の支配下において、万物を導きながら、増大や減少、分離や結合、およびこれらに伴うところの温かさや冷たさ、重さや軽さ、硬さや軟かさ、白や黒、苦さや甘さなどを生じさせるのです。つまり、心魂は、これらの運動変化をすべて用いているのですが、なおその上に、「知性」の助けをも得るなら……、万物を正しくまた幸福に導くことになるし、他方、無知を仲間にした場合は、万物をそれとは反対の状態にしてしまうわけです。一どうでしょう、以上述べたことは事実そのとおりであるとわたしたちは考えることにしましょうか、それとも、事実はそれとはちがっているかもしれないと、なお疑ってみることにしますか。

クレイニアス いや、その必要は少しもありません（プラトン、1976a, *Lg.* X 896E-897B）。

このように、増大や減少、分離や結合といったソーマの運動変化とともに、温かさや冷たさ、重さや軽さ、硬さや軟かさ、白や黒、苦さや甘さなどの感覚的諸性質が具体的に挙げられており、以上に挙げた『法律』第十卷の用例からは、「もの」としてのソーマが、空間性、運動性、感覚性といった三つの特性を持つことが読みとれるのである<sup>7)</sup>。またこれらの特性があらゆるソーマに共通して言えるのであれば、各種のソーマにもそれらが見出されるはずであろう。

たとえば、同じ『法律』第十卷では、自然界の生物として語られている天体について、次のような説明がなされている。

太陽のからだ（ソーマ）は、誰でもがこれを目にしているが、その心魂は、誰ひとりこれを見ることができません。そしてこのことは、他のどの生きもののからだ（ソーマ）についても同じであって、それが生きていてであろうと、死のうとしているときであろうと、そのものの心魂は肉眼では見られません。しかし、この心魂という種族は、からだ（ソーマ）のどんな感覚によってもまったく感覚されないものであるけれども、わたしたちにほんらいまといついで、「知性」によってはとらえられるものであると期待してよい理由は、大いにあるのです（プラトン、1976a, *Lg.* X 898D-E）。

つまり、天体のからだも、ソーマである限り、感覚されるものなのであって、これは上に指摘したソーマの感覚性に基づくものなのである。

また、『法律』第二巻にある歌舞の説明では、人間の身体（ソーマ）とギュムナスティケーの関係が、次のように述べられている。

アテナイからの客人 他方、身体（ソーマ）に関して、遊びに伴う踊りと言った部分については、もしその運動が身体（ソーマ）の徳をつちかうところまで及べば、身体（ソーマ）をそこまで技術によって導くことを、わたしたちはギュムナスティケーと呼ぶことにしましょう。

クレイニ阿斯 正当です（プラトン、1976a, *Lg.* II 673A）。

すなわち、ここでは、身体運動としての踊りが、身体の徳（アレテー）を形成するギュムナスティケーという技術的な過程の中に位置づけられていることがわかる。またこのほかにも、動物体とともに生物のからだ（ソーマ）一般に対する運動の必要性が説かれており（*Lg.* VII 789B-D）、ソーマと運動が密接な関係性を持って述べられているのである。

さらに、芸術の判定者の資質が語られる場面では、人工物（ソーマ）としての作品のできばえが、次のように空間的な観点から判定されるべきであ

ることが言われている。

アテナイからの客人 では、それらの模写において、模倣されている人工物（ソーマ）がそれぞれ何であるかをひとが知らないとしたら、どうなるでしょうか。はたしてその人は、それらの模写のうちで、正しくつくられているものを認識できるでしょうか。わたしの言おうとしていることは、たとえばこういうことなのです。その作品は、人工物（ソーマ）諸部分の数や位置に関し、事実あるだけの数を保っているかどうか、また、しかじかの部分がしかじかの部分の傍に置かれることによって、その人工物（ソーマ）はしかるべき秩序を一さらには色と形を一獲得しているが、そういう秩序その作品は保っているかどうか、それとも、それら諸部分のすべては、ただ雑然と製作されているのか、といったことの認識なのです。まさか、模倣されている動物の何であるかをまったく知らずにいながら、以上のことを識別できるとは、思われませんか。

クレイニ阿斯 むろん、どうして識別できましょうか（プラトン、1976a, *Lg.* II 668D-E）。

つまり、数や形、配置や秩序などは、芸術作品の構成上、不可欠な要素なのであって、とりわけこれらの幾何学的な性質が美的判断の基準におかれていることは、空間性だけでなく感覚性にとっても重要な意味を持つと考えられる。

このように、空間性、運動性、感覚性は、自然物と人工物、さらには生物と無生物の区別を問わず、あらゆるソーマに共通して見られるのである。しかしながら以下に見るように、プラトン哲学におけるこれら三つの特性は、現代におけるそれらとはいくらか様相を異にしているようである。次節では、まずソーマの空間性について諸家の見解を参考にしながら、比較的『法律』と成立年代の近い著作を見てみることにしよう。

## II ソーマの空間性

一般に『法律』と同じ後期作品とみなされている『ティマイオス』において、プラトンは、現代のわれわれが「空間」と呼んでいるものを、「ケノン（空虚）」、「トポス（ところ）」、「ヘドラ（座）」、「コーラー（場）」などの言葉によって表している。ただしプラトンの場合、宇宙の内部にケノン（空虚）は否定され<sup>註8)</sup>、主にトポスはその上を物が移動する「場所」のようなものとして語られていることから<sup>註9)</sup>、上に挙げた前二者は、ソーマの空間性そのものと直接的には関わりがないように思われる。

また、このような空虚の否定とともに運動の可能性を認めるということが、一見矛盾した事態であることをエレア派のメリッソスが次のように述べていた、と伝えられている。

いかなる空虚もあらぬ。なぜなら空虚はいかなるものでもあらぬから。すると、いかなるものでもあらぬものはまた、ありえないのである。また、それ[あるもの]は動くことさえできない。というも、それはどこにも退去しえず、むしろ充実しているからである。実際、もしそれが空虚なものであれば、それは空虚へと退去していこう。ところで、いかなる空虚もあらぬとすれば、それは、退去のためのいかなる場も持たないであろう（シンプリキオス、1997、DK. 30. B7. 7）。

つまり、ここでメリッソスが言わんとしているのは、一つの空虚も残されていないとすると、充実している物の不可入性が運動の余地を残さないということである。

これに対し、プラトンは宇宙の内部にケノン（空虚）の存在を認めないが、ディアケノン（間隙）の存在を認めて、物に運動の余地を残している<sup>註10)</sup>。またこのような充実した物同士の関係は、プラトンの空間的思考の一面を表しており、さらには後に詳しく見るソーマの運動性や感覚性にも

深く関わっているのである。すなわちプロシャール（1929, p. 23, Brochard, 1912, p. 107）が指摘しているように、プラトンは、「空間を以て質料を説明したのではなく、逆に質料を以て空間を説明した」<sup>註11)</sup>のであり、上に挙げた四つのうち、残りのコーラー（場）とヘドラ（座）が、そのような力動的な空間の役割を担っているのである。

たとえば、『ティマイオス』第二部において、コーラーは常にあるアイデアを写し出し、その似像としての生成物を受け入れる受容体であるとされ（*Ti.* 49A）、そのほかにも「乳母のごときもの（*Ti.* 49A, 52D）」、「すべてのソーマを受け入れるもの（*Ti.* 50B）」、「無形のもの（*Ti.* 51A）」、「感覚ではなく、まがいの推理によって捉えられるもの（*Ti.* 52B）」と呼ばれている。

とりわけ、ここで重要なのは、コーラーが、「すべてのものの印影の刻まれる地の台をなし、入ってくるものによって動かされたり、さまざまの形を取ったりしているものであって、このようにして入ってくるもののために、時によっていろいろと違った外観を呈している」（プラトン、1975a, *Ti.* 50C）と言われていることであろう。つまりプラトンの言う空間とは、デカルト主義者の言う等質的な空間ではなく（Sallis, 1995；Rosen, 1995）、内包物の性質によって満たされ、動かされ、変形させられる充実空間なのである。

さらに、宇宙創造以前にも、コーラーがあらゆるソーマの最小構成要素である四元素（火水風土）の「何らかの痕跡 *ιχνη ἄττα*」を持ち（*Ti.* 53B）、それら四元素のそれぞれもまた「固有の場所 *ἴδιος τόπος, οἰκεία χώρα*」<sup>註12)</sup>を与えられていることからすれば、コーラーは、ある意味において、ソーマから独立した形では存在せず、そこからソーマが取り去られても、コーラーだけがそれ自体として残るような無機質な空間ではないと言えるだろう。

ただし、コーラーだけでは、ソーマの空間性にとってまだ不十分である。というのもコーラーは「生成物<sup>8</sup>がその中で生成するもの *τὸ ἐν ᾧ γίνεταί*」（*Ti.* 50D）であって、ソーマを内在的に規定する要素ではないからである。むしろプラトンの場合、

そのような役割は、アイデアの似像としてコーラーの中に入ってくる「形 σχῆμα, μορφή」が担っている。つまりコーラーと似像がそれぞれ、材料となる「黄金」とそこに作られる「三角形やその他その中に生じた限りの図形 τὸ τρίγωνον ὅσα τε ἄλλα σχήματα ἐνεγίγνεται」に喩えられているように (Ti. 50A-B), コーラーを立体化し空間化するのには、アイデアの似像として写し出される幾何学的対象なのである。

また、同じ後期作品の『ピレボス』では、常に運動して止まない「無限」の類に、数量間の比例関係である「限度」の類を混ぜ合わせると、ある種の生成物が出てくるとされ、この生成した「混合」の類には、「美」や「強さ」「健康」といった身体の徳 (アレテー) が具体例として挙げられている。そしてその生成過程については、「一定量や適度 τὸ ποσὸν καὶ τὸ μέτριον」といった「限度」が、「無限」の占めているヘドラ (座) に入り込むことで、「無限」がコーラーから流れ去ることが言われており (Phlb. 24C-D), 『ピレボス』の「限度」と『ティマイオス』の似像は、コーラー論を介して結びつくように思われる。

一方、『ティマイオス』では、各種のソーマが幾何学的な観点から説明され<sup>13)</sup>、幾何学的対象は、アイデア界と現象界とを結ぶ媒介項となっているのである。また先に見た『法律』第十卷 (Lg. X 896C-D) では、ソーマの性質として「奥行き βάθος」が挙げられていたが、この『ティマイオス』でも、天球が「奥行き」を持った「立体 στερεόν」であると言われたり (Ti. 32A-B), ソーマが「立体」と互換的に使用されたりしている (Ti. 55A)。すなわちプラトンのテキストにあっては、点や線、面といった「奥行き」を持たないものをソーマと呼ぶ用例は存在せず、形や数も三次元の「立体」となって始めてソーマと呼ばれるのである。

他方、『ピレボス』では、「限度」の類が、「等と二倍と、そしておよそ相互に相反するものとの不一致を終息させ、数の導入によって、これらを度に合うもの (共通の単位で計ることのできるもの)、調子の合うものにするもの類」(プラトン、

1975b, Phlb. 25D-E) と言われていることから、『ピレボス』は『ティマイオス』の幾何学的な世界像に比べ、代数的な世界像を基調としていることがわかる。また Sayre (1998) によって、代数的な対話篇である『ピレボス』は、幾何学的な対話篇である『ティマイオス』の発展型として見なされており、ここからは幾何学に対する代数学の優位性を窺い知ることができるだろう。

たとえば、同じく最後期の作品と見なされている『エピノミス』<sup>14)</sup> では、共約不可能な数と数を面積 (平面) や体積 (立体) に関係づけ、両者を比較可能なものに変換することで、幾何学が数論に還元されている<sup>15)</sup>。そしてここでは、数がアイデアよりも根本的な存在と見られていることから、『エピノミス』の数論は、アリストテレス (1959, p. 46-49, *Metaph.* 987a9-988a17) が伝えている「アイデア数の説」にもつながる考え方であるように思われる。つまり「アイデア数の説」とは、プラトンがアイデアそのものを「一」と「不定の二 (大と小と)」に分析し、「一」が「不定の二」を限定して一定のものたらしめるとする説のことであるが、これら「一」と「不定の二」は、上で見た『ピレボス』の「限度」と「無限」に近いものと考えられているのである (Jackson, 1882)。

ただし、ここで重要なのは、このような「一」や「不定の二」といった数が、アイデアの構成要素であり、さらにそれらがあらゆる存在の構成要素となっていることである。すなわちこのことと『エピノミス』の数論を併せて考えるならば、ソーマの形相的原理は窮極的には数であり、「一」であることになるだろう。

このように、『法律』と同じ後期作品とみなされる『ティマイオス』や『ピレボス』、『エピノミス』には、代数学や幾何学の観点から世界のあり方を説明するという共通した立場がとられている。つまり、「少なくとも物的なものにおいては、アイデアの模像は図形と数量関係 (ことに比) によって成立するということである。この自然界においては、アイデアの合理性ないし論理性は、空間化され、感覚界に投影されて幾何学的な図形と数関係という空間的合理性ないし論理性になるの

である」(鈴木, 1982, p. 257)<sup>16)</sup>。したがって、このような感覚的事物に内在する立体性こそが、まさしくソーマの空間性なのであり、また言い換えるなら、それは充実空間であるコーラーと常にあるアイデアとの間に成立する似像に他ならないのである。

### III ソーマの運動性

さて、上で見たように、充実空間においてソーマが互いに接触し、立体的な構造に即した運動変化をおこなっているとすると、その運動性はいかなる様相を呈するのだろうか。ここでは、まずこの充実空間ということ念頭において、もう一度『法律』第十巻の運動論を見てみることにしよう。

『法律』第十巻では、無神論的な自然学説への反駁として、心魂の方があらゆるソーマよりも先なる存在であることが、十種類の運動(①回転運動, ②移動, ③分解, ④合成, ⑤増大, ⑥減少, ⑦消滅, ⑧生成, ⑨他動, ⑩自動)の分析から証明され、なかでもプラトンは、⑩の自動と⑨の他動を、心魂とソーマそれぞれに固有の運動と見ているのである。すなわちプラトンの場合、心魂のみが、自らによって内から自己自身や他のものを動かすのであり、ソーマは、他のものによって外から動かされる存在にすぎないのである<sup>17)</sup>。

ただし、先に引用した箇所において(Lg. X 897A-B)、心魂の第一次的な運動がソーマの第二次的な運動を導いていると言われていたように、プラトンは心魂とソーマを連関させ、ソーマの運動に新たな様相を与えている。つまり、自動の心魂は、他動のソーマを導くことで、それにある種の自律的な運動をもたらす(Lg. X 895C-D)、さらには「知性」の助けを借りて、万物に斉一的な現象を作り出しているのである(Lg. X 897C)。

また、①の回転運動は、このような「知性」の運動と同族的であるとされるが(Lg. X 897D-899B)、②の移動、すなわち「多くの場所における運動」は、ソーマ同士の接触や衝突の起点となるとともに、「無知」と同族的な運動となると考えられる。というのもこの「無知」と同族

的な運動は、「同じ場所においてでもなければ、同じ中心をめぐるのでもなく、同じものとの関係においてでもなければ、一つの場所において動くのでもなく、秩序もなければ、規律もなく、また何かの理法に従っているのでもない」(プラトン, 1976a, Lg. X 898B)と言われ、その背後には、あらゆるソーマの構成要素となる粒子(四元素)の渦動が想定されているからである。そしてこの渦動こそが、ソーマの運動が無秩序であると言われる所以なのであって、②から⑧は、②を起点として、一連の運動過程をなしつつ、⑨の他動に集約されるのである<sup>18)</sup>。

このように、プラトンの場合、ソーマ同士の運動変化はすべて、充実空間における粒子の接触や衝突によって引き起こされるのであり、⑨の他動には、こうした粒子論的な運動過程を読み込む必要があると言えよう。

ところで、『ティマイオス』でも、ソーマの運動が、「他のものによって動かされて、また『必然に従って *κατὰ ἀνάγκης*』別のものを動かす」(プラトン, 1975a, Ti. 46E)と言われ、他動が「必然 *ἀνάγκη*」とともに語られている。この「必然」という言葉は、プラトンの著作において論理的な意味から運命や神の名前に至るまで様々な使われ方をされているが<sup>19)</sup>、プロクロス(1967)によると、「『国家』のアナンケーの女神が、神々を支配し……『ティマイオス』の必然は、ソーマの動力である」とされているのである。

また、『ティマイオス』に挙げられている七種類の運動のうち(Ti. 34A)、回転運動を除く、前後左右上下の六つの運動は、他動もしくは無秩序な運動であり(Ti. 43B)、さらにこれらは多方向的で、断続的であるがゆえに、渦動や休止の可能性を持っていると考えられる(Ti. 58A-B)<sup>20)</sup>。つまり天体に見られる斉一的で円環的な運動に対し、ソーマ同士の運動は無秩序で点線的なのであって、『ティマイオス』の「必然」はこうした相互依存的な運動の様相を表しているのである。

さらに、田中(1981, pp. 389-397)は、このような「必然」を、アリストテレス(1959, p. 164, *Metaph.* 1015a20-21, 1015a26)の観点

から「条件的な必然」と「非合理的な必然」の二つに区別している<sup>21)</sup>。「条件的な必然」とは、ある目的にとってはなくてはならない必要条件的な必然性のことであり、他方「非合理的な必然」とは、目的論的な秩序から抜け落ちてしまう無理強い必然性のことである。たとえば、神々が人間の頭を製作する場合 (*Ti.* 75B-C), 人間の頭を鋭敏なものにするために薄い骨を用いるならば、この薄い骨は、鋭敏な頭にとっては「条件的な必然」となり得るだろう。しかし薄い骨の脆さに伴って生じる災いは、頭にとって「非合理的な必然」として立ち現れてくるのである<sup>22)</sup>。

また、Morrow (1950) は、上の分析を一歩進めて「必然」を「知性  $\nu\omicron\upsilon\varsigma$ 」や「偶然  $\tau\upsilon\chi\eta$ 」との関係から考察しており<sup>23)</sup>、「知性」と「偶然」は「必然」によって生じる様々な「原因—結果」の線を「配列 collocation」させる要因となっていると指摘する。つまりかれによれば、「知性」は、様々な因果の線を「集束 convergence」させていくことで秩序をもたらし、他方「偶然」は一目的に適うにせよ、適わないにせよ—「必然」の因果的な連鎖を「交差 intersection」させ「結合 conjunction」させると言われているのである。

実際に『ティマイオス』のテキストにおいても、「偶然」は粒子の「出会い  $\sigma\upsilon\nu\tau\upsilon\chi\acute{\alpha}\nu\epsilon\iota\nu$ 」もしくは「衝突  $\pi\rho\omicron\sigma\omega\iota\tau\tau\epsilon\iota\nu$ 」に還元され<sup>24)</sup>、このような「偶然」の出会いが、後に続く「必然」の運動契機となっていることがわかる (*Ti.* 56D)。ただしすでに指摘したように、このような粒子の衝突による運動は、あくまで無秩序であり、渦動や休止の可能性を持っているのである。

また、『法律』第十巻において回転運動が「知性」の運動と同族的であるとされていたように (*Lg.* X 897D-899B), 『ティマイオス』にも、「知性」の秩序づけによって生じた円環的な運動が、以下のように数多く見出される。たとえば「天体の運動とその観察 (*Ti.* 47B-C)」や「文芸の諧調 (*Ti.* 47C-E)」、呼吸の循環 (*Ti.* 79B)」、ギムナシア—(競技的運動)とその効果 (*Ti.* 88C-89A)<sup>25)</sup> など、これら斉一的な現象はすべて「知性」の回転運動と「必然」の点線的な運動

の協働によるものなのである<sup>26)</sup>。

このように、『ティマイオス』のテキストからも Morrow の指摘は十分に首肯され得るのであり、上の「条件的な必然」と「非合理的な必然」の差異は、様々な「原因—結果」の線を如何なる契機によって「結合」していくかの違いにあることがわかるだろう<sup>27)</sup>。つまり、「必然」は「知性」に支配され、善に方向づけられるならば、秩序のある円環的な運動を行うが、無知や「偶然」にまかせて放置されるならば、行き当たりばったりで無秩序な運動を行うことになるのである。

たしかに、ソーマは同じソーマとの関係においては、あくまで他から動かされ、渦動や休止の可能性を持つ無秩序な運動を行うにすぎない。しかしながらプラトンの場合、ソーマは心魂や「知性」と連関することで、一定の形態と方向性を持った持続的な運動性を得ることになるのである。とくにプラトンは、天球や天体を生物とする独特の生命観の持ち主であり、上で見たような運動の原理は、マクロの天球からミクロの粒子まで一貫している。したがって、ソーマの運動性は、粒子の無秩序な運動を構成要素としながらも、心魂や「知性」に従う可能性を持った未完了的なプロセスとすべきものなのである。

#### IV ソーマの感覚性

プラトン (1976b, *Sph.* 248A) は、同じく後期作品の『ソピステス』において、「われわれはソーマにより、感覚を通じて、〈生成〉と関わりをもち、他方、心魂により、思惟を通じて、真の〈実在〉と関わりをもつのだ」とエレアからの客人に語らせているが、すでに中期作品の『パイドン』でも、ソーマによる感覚の領域は、思惟による真実在の認識に比べ価値的にも低い位置づけをなされている (*Phd.* 65A-66A, 79A, 79C, 83A-C)。ただしプラトンの場合、「アイステシス (感覚—知覚)」の問題は、認識論や感情論、教育論など、幅広い分野にわたって論じられ、それに対するかれの捉え方も非常に多岐にわたっている。本節では、それらすべてを把握することは

不可能であるにしても、ある程度、アイステーシスの成立過程とその役割を概観し、アイステーシスがソーマ論にとってどのような意味を持つのかを問題にすることは可能だろう。

また、プラトン (1975b, *Phlb.* 34A) 自身も『ピレボス』の中で、「心魂とソーマとが一つパターマ (情態変化) のなかに共同の形でおかれていて、共同的にまた動くとき、この動を別にまた『アイステーシス』という名で呼ぶ」と述べていることから、アイステーシスの考察には、心魂とソーマの両面からのアプローチが必要であることがわかる<sup>注28)</sup>。さらに『ティマイオス』では、アイステーシスの成立過程が自然学的な観点から考察されており、Brisson (1997, p. 162) は、そのようなプロセスを次のようにまとめている。

外からやって来る粒子が、人体のある部分におつかり、もし、この衝突が、衝突する粒子の構造や数、速さに基づく、パターマやパトスを引き起こすならば、その時に発せられた運動は、血液によって全身を通り、まずは、心魂の可死的部分に、それから「プロニモン」と呼ばれる理知的部分に伝達される。そこにおいて、その運動は「アナムネーシス」と呼ばれるプロセスを誘発する。「アナムネーシス」とは、心魂が身体から分離した時に観たいデアを想起することであり、想起は、思考や名づけの活動が生ずるのを許すのである。

このような Brisson の分析は、非常に詳細で、かつ広範囲にわたっており、上の引用に収まりきれない部分もかなり存在するが、とりあえず、本節では、上のプロセスを念頭におきながらソーマの感覚性の考察を進めていくことにする。ただし Brisson が他の箇所で行っている感覚媒体や感覚器官、血液、心魂の可死的部分 (すなわち、不死なる理知的部分に対する気概や欲望の部分) などの詳細な分析は、また別の機会に検討することにし、本節では、外的な刺激によって起こる熱冷乾湿などの「パターマやパトス (感覚的諸性質もしくは情態変化)」が、人体内の運動である「アイ

ステーシス (感覚—知覚)」となることで、人体や心魂にどのような影響を与えるのか、を主に探ってみることにしたい。

さて、すでに見た『法律』第十巻では、ソーマの二次的な運動として実体的な変化である増大や減少、分離や結合のほかに、温かさや冷たさ、重さや軽さ、硬さや軟かさ、白や黒、苦さや甘さなどのパターマ (感覚的諸性質) が挙げられていたが、『ティマイオス』では、このようなパターマは四元素 (火水風土) の形態や運動に基づいて説明されている。たとえば、熱さは、正四面体である火の粒子の微少さ、稜線の繊細さ、運動の速さなどによって、それが接触するものを鋭く分断させる結果であり、鈍さは、立方体である土の粒子の大きさ、底面の坐りの良さ、運動の遅さによるものなのである (*Ti.* 56A-57A)。

また、上で見たように、ソーマ同士の運動変化はすべて、充実空間における粒子の接触や衝突によって引き起こされ、そのような接触によって生まれるパターマは、後に続く「必然」の運動契機となっていたが、あくまでもこのような粒子の衝突は「偶然」によるものなのであった (*Ti.* 56D)。そしてこのパターマが粒子間の相互依存的な運動によって引き起こされるには、粒子間の不等性に基づく不均等性の維持が必要であり (*Ti.* 57E-58C)、さらに不等性はもともと個々の立体を構成する要素三角形の大きさが、無限に多様であることによって生じるとされているのである (*Ti.* 57C-D)。つまり、パターマとは、ある意味において心魂とは関わりなく<sup>注29)</sup>、ソーマがソーマによって蒙る情態変化を意味しており、さらにその起源はそれぞれの粒子が持っている立体的構造の異質性や多様性にあると考えられるのである。

ところで、このようなパターマが人体に生じる場合、それは人体にのみならず、心魂に如何なる影響を及ぼすことになるのであろうか。たとえば『ティマイオス』において神々が人体に心魂を結びつけ、嬰兒の動作が語られる場面では (*Ti.* 43B-44A)、パターマが人体の無秩序な運動を引き起こす原因として語られている。またパターマの影響が心魂にまで及ぶ場合には、その一連の運

動がアイステーシスと呼ばれ、心魂の回転運動を混乱させると言われているのである。しかもこのような指摘は、他の箇所において人体の健康が人体の内外に生ずるパターマによって脅かされ (Ti. 76E-A, 88D)、さらにはそのような身体的な条件によって心魂の病気も生ずる (Ti. 44C, 86B-87A) とされていることとも重なってくるだろう。つまりパターマはソーマの領域に生じて人体に様々な悪をもたらすだけでなく、その影響が心魂に達してアイステーシスとなる場合、心魂にも多くの悪をもたらすのである。

つまり、先の運動性の分析では、心魂の回転運動だけでなく、人体の様々な領域にも斉一的な円環運動が見られることを指摘したが、プラトンの場合、人体においても心魂においても、外からやってくる粒子の点線的な運動が、斉一的な円環運動を正常な運行から逸脱させたり、その回転の方向を逆転させたりして、悪を生み出すのである<sup>注30)</sup>。『法律』第十巻の「多くの場所における運動」が「無知」と同族的な運動と見られたように、悪の起源は、粒子の形態の多様性、さらにはそれによってもたらされる粒子の渦動にあると考えられる<sup>注31)</sup>。

これに対し、プラトンは『ティマイオス』の中で、われわれ人間の視覚や聴覚が、天体の運行や文芸の諧調に見られる斉一的な円環運動を受容し、上のように混乱した心魂の回転運動を矯正するために神々から与えられた (Ti. 47B-47E) としている。また、その『ティマイオス』では、パターマによって無秩序な運動を強いられている人体に、「ギュムナシアー (競技的運動)」が万有や思考と同族的な運動を作り出すと言われ (Ti. 88C-89A)、さらに『法律』第二巻の教育論でも「歌舞 χορεία」が運動と音声の秩序に関わるアイステーシスを養うことが言われている (Lg. II 664E-665A)。つまりパターマやアイステーシスは、人体や心魂のはたらきを混乱させる一方で、それらが斉一的な円環運動に従う場合には、様々な秩序を回復するための手段ともなり得るのである。

というのも、『ティマイオス』では「必然的な

もの」としてのソーマは、「とにかくそれなくしては、われわれが真剣に考える当の対象そのもの (すなわち「神的なもの」) も、それだけでは感知することも、捉えることも、その他どんな仕方でもそれに与ることができない」(プラトン, 1975a, Ti. 69A) のであり、「神的なもの」としての善の追求に必要な手段となっているからである。また上のような目的・手段関係は、以下に挙げる『法律』の箇所からも傍証され得るのではないだろうか。たとえば、すでに見た『法律』第十巻において (Lg. X 897A-B) 心魂の第一次的な運動がソーマの第二次的な運動を「利用する  $\chi\rho\eta\sigma\theta\alpha$ 」とされ、「なおその上に、『知性』の助けをも得るなら……、万物を正しくまた幸福に導くことになるし、他方、無知を仲間にした場合は、万物をそれとは反対の状態にしてしまうわけです」(プラトン, 1976a, Lg. X 897B) とされていた。

さらに、『法律』の最終巻でも、国制と法律の保全のために、どのようにして生物の安全がもたらされるのが問題にされて、「知性」とアイステーシスの関係が、次のように述べられている。

アテナイからの客人 心魂のなかには、他の能力に加えて知性 (ヌウス) が宿っているし、また頭には、他の感覚に加えて視覚と聴覚とが具わっている、ということによってなのです。そして簡単にいえば、「知性」が、最も高貴な感覚であるそれら二つの感覚と結びついて、これらと一体となって働くときに、それぞれの生物の安全は保たれるとって間違いのないでしょう。

クレイニ阿斯 それはたしかにそのようですね (プラトン, 1976a, Lg. XII 961D)。

また、具体的な事例としては航海術や統帥術、医術が挙げられ、それらの技術に関わる「知性」はそれぞれ、船や軍隊、人体の安全のためにアイステーシスを結びつけると言われている。つまり『ピレボス』でも強調されるように、もし快楽やアイステーシスが「知性」の支配に与らなければ、

それらは生命体そのものの安全を脅かし、ひいては快楽やアイステーシス自身の存在をも危うくすることになるのである (*Phlb.* 26B-C, 61D, 62E).

さらに、その『ピレボス』では、快楽の種類分けの中で純粋快を伴うものとして「自体的に美なるもの」が紹介され、これは、「何かとの関係で美しいというのではなくて、それ自体でいつも美しくあるような本来自然のあり方をしていて、ある種の快適さを自己自身のうちにもっている」(プラトン, 1975b, *Phlb.* 51E-D)と言われている。具体的には、形や直線、円、平面、立体などがそれであって、最終的に「知性」や思慮は、このような純粋快との混合を認め、さらには健康と節制を伴う快楽やすべての徳 (アレテー) に伴う快楽もこの混合に加えているのである (*Phlb.* 63C-63A)。とくに先に引用した『法律』第二巻において、数や形、配置や秩序などが芸術判定の基準におかれていたこと (*Lg.* II 668D-E) や、『ティマイオス』で、パターマが四元素の立体的構造に即して説明されていたこと (*Ti.* 56A-57A) を併せて考えるならば、アイステーシスには、代数学的あるいは幾何学的対象が先在していることがわかるだろう。

Brisson (1997, pp. 155-156) も、アイステーシスを生み出す運動の形態が、感覚物と感覚器官の代数学的対象の構造や数、速さに依存し、アイステーシスの成立がそれら代数学的対象同士の「尺度の一致 *συμμετρία*」にあると見ている<sup>32)</sup>。またBrisson (1997, pp. 159-163) は、心魂の欲望的部分が思わくや計算や「知性」に決して与ることがない (*Ti.* 77B) と言われていることなどを典拠に、心魂の可死的部分 (すなわち、気概や欲望の部分) は、パターマを知覚することはできるが、パターマについて思考したり、それらに名前を与えることはできないとして、そのような能力を心魂の理知的部分に求めているのである。いわば、この理知的部分こそがアイデアの想起とともに感覚印象に名前を与えるものであることは、本節の初めに見たBrisson (1997, p. 162) の引用にも示されていたとおりである。

実際に『パイドン』や『パイドロス』においても、アイステーシスは真実在 (アイデア・エイドス) を思い浮かべる機縁となっており (*Phd.* 73C-E, 75A-B, 75E-76A, 76E, *Phdr.* 249B-C), 総じてパターマやアイステーシスは、アイデアの想起や、知的もしくは言語的活動一般、代数学的あるいは幾何学的対象によって存在意義を与えられるものであることがわかる。

とくに、『パイドン』では、当時の唯物論的自然学説の典型例とも言える「心魂ハルモニア説」に対し、心魂の身体に対する能動性に基づく反証がなされている (*Phd.* 94B-D)。「心魂ハルモニア説」とは、非物体的な音楽の調べが物理的な豎琴によって生成するが如く、心魂も身体的な諸要素の調和 (ハルモニア) からなる可滅的な存在であるとする説のことであり、現代の自然科学的な生命論にも極めて近いと言える。しかし現実には、ギムナスティケーや医術の場合のように、思慮ある (プロニモス) 心魂は、単に身体のパターマに同調し、受動的に従うのではなく、むしろ諸々のパターマに抵抗し、それらを能動的にコントロールしているのであって、プラトンは、この反証から「心魂ハルモニア説」が抱える隘路を導き出すとともに、身体的心魂に対する従属性こそが、そのような技術的アプローチを可能にしていると考えているのである。

したがって、本節の始めにも述べたように、ソーマの感覚性は、粒子の多様性とその衝突によって引き起こされるパターマ (情態変化もしくは偶有的性質) にあると言えるが、一方で、パターマがアイステーシスとなって心魂や人体に無秩序な運動をもたらすならば、それは悪の起源となるのであり、他方で、アイステーシスが心魂の「知性」によって導かれるならば、それは秩序の回復やアイデアの想起の機縁ともなり得るのである。そして後者のように「知性」とソーマの主従関係が保たれるとき、ソーマの感覚性もまた、空間性や運動性と同じく、善や美の実現に必要な不可欠な手段となってくるのである。

## おわりに

これまで見てきたように、ソーマの原理的なあり方を規定する、空間性、運動性、感覚性といった三つの特性は、現代の自然科学的なそれらとは異なるプラトン独自の様相を呈するものであった。まず、ソーマの空間性は、充実空間であるコーラーに投影されたアイデアの似像であり、アイデアの幾何学的形象化によって成立する立体性なのである。また、ソーマの運動性は、もともと粒子の「偶然」の衝突が「必然」に引き起こす無秩序で点線的な他動性にあるが、ソーマが心魂や「知性」と連関する場合には、自律的で斉一的な円環運動を得ることになるのである。さらに、ソーマの感覚性は、粒子の立体的構造の多様性に根拠を持つパテーマ（情態変化もしくは偶有的性質）のことであった。パテーマは、「無知」や「偶然」によって放置される場合、心魂や人体に様々な悪をもたらすが、逆に「知性」の支配に与る場合には、善の実現や秩序の回復に寄与することになるのである。

したがって、これらの考察結果から言えることは、ソーマが、従来のプラトン研究で指摘されてきたように、心魂や「知性」にとって否定的な存在なのではなく、むしろ心魂や「知性」と不即不離の関係におかれることで善悪いずれの方向にも傾き、さらに、より積極的な意味においては、善の実現や秩序の回復に必要なものとなっているということである<sup>注33)</sup>。まさに、プラトンの身体論を語りうる地平は、心魂や「知性」、アイデアといった哲学原理によって切り拓かれるとともに、現代における無機質で、無目的で、没価値的な物質の捉え方を相対化し、弁証法的に止揚していく上でも、十分に有効性をそなえていると言える。というのもそれらの哲学原理は、あらゆるソーマの成立原因となっており、円環運動や幾何学的対象、言語活動などを通して、ソーマの形態や運動に秩序や目的、価値を与えているからである。ただしこのような地平は、従来のように考察対象を物体に限定せず、多種多様なソーマを分析して

いくことで、今後さらに拡張されるべきであるように思われる。

そして、あらゆるソーマの存立が、心魂や「知性」、アイデアのはたらきによるのであれば、同じくソーマと呼ばれる人間の身体も、「知性」のはたらきの一つであるギュムナスティケーとの関わりにおいて、自律的で秩序のあるものに改変されなければならない。おそらく、ギュムナスティケーが人間の身体に関わりうる根拠も、そのようなソーマの従属的かつ必要条件的なあり方に見出すことができるのではないだろうか。

## 謝辞

本稿の執筆にあたっては、佐藤臣彦先生（筑波大学体育科学系）をはじめ、本誌審査員の先生方からも、様々なご教示をいただきました。記して感謝いたします。

## 注

注1) *Cra.* 400C, *Grg.* 493A, *Phdr.* 250C (*Phd.* 62B). また、普通、古典ギリシア語の「プシューケー  $\Psi\upsilon\chi\eta$ 」には、「たましい」という訳語が用いられているが、プラトンの言うプシューケーは、精神の高度に意識的な側面から、無意識的な生命現象まで幅広い意味を持つものである。本研究は、田中（1981, pp. 87-88）に倣って、これに「心魂」という訳語を当てることにした。なおギリシア・ローマの古典作品名の略記については、L.S.J. (Liddle, Scott & Jones, *Greek English Lexicon*) および O.L.D. (*Oxford Latin Dictionary*) の略表記に従う。

注2) 一般に、古典ギリシア語の「ギュムナスティケー  $\gamma\upsilon\mu\nu\nu\sigma\tau\iota\kappa\eta$ 」には、「体育術」や「体操術」という訳語が当てられているが、ギュムナスティケーは、近代語の「体育」には収まりきらない豊富な意味内容を持つ語である。とくに、プラトンの場合、このようなギュムナスティケーの外延の広さは、かれのギュムナスティケーに関する思想内容にも少なからず影響しており、訳出作業そのものは今後の研究成果を踏まえた上で慎重に行われる必要があるだろう。これらの理由から、本研究では、ギュムナスティケー

- を日本語に翻訳することはひとまず留保し、そのまま片仮名で「ギュムナスティケー」と表記することにした。
- 注3) 近年、人間の身体を考察の対象とするものとしては、Joubaud (1991) による『ティマイオス』の注釈書が、またプラトンの身体論を再評価するものとしては、Johansen (2000) による『ティマイオス』の研究論文がすでに公にされている。
- 注4) 著者(木庭, 2001b)は、すでに別の機会において、プラトン哲学の三原理である心魂や知性、アイデアのそれぞれとソーマとの関係を考察することにより、自動と他動の主従関係、善と必然の目的・手段関係、一と多の原範型—似像の関係といった身体論の分析枠組みを提示している。プラトンの身体論は、かれの哲学思想のなかで心魂論やアイデア論の写しとして機能しているのであって、ギュムナスティケーの対象となる人間の身体もまた、これらの分析枠組みを軸にして再定義されるべきであることがすでに明らかにされている。
- 注5) 「ソーマ σῶμα」の外延が広いのは、アリストテレスの場合も同様である。アリストテレスの身体論については、桑子(1999)および佐藤(1999)を参照されたい。
- 注6) 底本には、Burnet (1900-1907)、邦訳には、田中・藤沢(1975-1978)の編集によるものを用い、「ソーマ σῶμα」の訳語や細部の表現に関して若干の変更を行った。
- 注7) 同じく、鈴木(1982, pp. 227-274)や土屋(1991)も、このような三つの観点からソーマについて論じている。ただし、鈴木の場合、運動性から時間性を独立させて考察しているが、本研究では、時間性を運動性に含めて考察することにする。時間性については、本文の第三節「ソーマの運動性」および注26を参照されたい。
- 注8) 『ティマイオス』においてケノン(空虚)の否定が語られる箇所は、以下に示すとおりである。Ti. 58A, 59A, 79B-C, 80C.
- 注9) トポス(ところ)については、以下の箇所を参照した。Ti. 52A, 57C, 58B, 60C, 63C, 63D, 72B, 87A.
- 注10) 『ティマイオス』においてディアケノン(間隙)の存在が語られる箇所は、以下に示すとおりで

ある。Ti. 58B, 59C, 60E, 61B. ただし59Cには「間隙」の意味に‘διάλειμμα’いう語が使用されている。この「空虚は認めないが、間隙は認める」というプラトンの主張は、自らのうちに運動や停止の原理を持たない粒子(四元素)が、どのように活動を維持したり休止したりするのかを説明するのに、必要不可欠な原則である。たとえば、本文でも述べたように、充実空間において一つの空虚も残されていないとすると、充実している物の不可入性のために場所的運動はあり得ず、さらには粒子の衝突によって常に変化が引き起こされ、変化を伴わない場所的運動はあり得ないことになってしまう。これに対して、プラトンは、宇宙の内部に空虚の存在を認めない代わりに、間隙の存在を認めて、場所的運動の可能性を確保し、小さな粒子が大きな粒子の間隙に移動して入り込む場合、変化は生じないと述べているのである(Ti. 58B)。この問題についてさらに詳しくは、本文の第三節「ソーマの運動性」および注17, 18を参照されたい。またギリシア思想における空間概念については、田中(1969)が詳しい解説を行っており、筆者の見解も、この田中の論に依拠するところが大きいと言える。

- 注11) ただし、ここで言う「質料 la matière」とは、アリストテレスの言う意味での「形相」と同関的な概念であり、広義では「素材」を意味する。つまり、ブロシャール(Brochard)は、この語の使用において、全く「形相」を持たないと言われるアリストテレスの「第一質料」を念頭においているのであり、同時にブロシャールの言う「質料」はプラトン研究にあって「プラトンの物質 die platonische Materie, Platonic matter」と言われているものであるだろう(Zeller, 1889, SS. 721, S. 723; Cherniss, 1954, pp. 255)。鈴木(1982, pp. 249-252)によれば、いわゆる「プラトンの物質」は、その表現の不適切さにもかかわらず古くから用いられており、感覚的物体の根拠となるもの表しているとされる。また金松(1976)が指摘しているように、プラトン自身はコーラーを「質料」と呼んでおらず、コーラーはそこから世界が自然発生的に出て来たもとのものという意味での「質料」ではない。したがって「プラトンの物質」は、本研究の考

察対象であるソーマと同じではなく、窮極的にはソーマの素材となるコーラーを意味しているのである。

注12) 『ティマイオス』において「固有の場所」が語られる箇所は、以下に示すとおりである。Ti. 53A, 57C, 58B, 63B, 82A, 83A.

注13) 『ティマイオス』では、天球 (Ti. 33B) や天体 (Ti. 40A), 人間の頭 (Ti. 33B) が「球形 σφαιροειδής」に、頭の乗り物である胴体は「縦長 μήκος」に作られている (Ti. 44E)。また脳は「どこから見ても丸いもの περιφερή πανταχῆ」とされ (Ti. 73C-D), さらに髄は「丸くて同時に長い形 (円筒形) ἄμα στρογγύλα καὶ προμήκη σχήματα」と言われている (Ti. 73D)。そして、これらの構成要素となる四元素についても、火が正四面体に、空気が正八面体に、水が正二十面体に、土が立方体に割り当てられて、それぞれが説明されているのである (Ti. 55D-56B)。

注14) ディオゲネス＝ラエルティオス (1984, D.L. III 37) の証言によれば、『エピノミス』はオプスのピリッポスという名の人物によるものとされているが、この証言を信頼する限り『エピノミス』はプラトン自身の作品ではないと言えるのかもしれない。しかしながらキケロ (1999, De Or. III 6. 21) の伝える『エピノミス』の引用を証拠として、これをプラトンの真作と見る意見も数多く存在する。またピリッポス自身も、プラトンの最晩年にアカデメイアで行われていたプラトンの講義を聴講していたと考えられることから、『エピノミス』は、真作、偽作のいずれにしても、当時のアカデメイアでなされていた学説を強く反映した作品であることに変わりはないだろう。

注15) *Epin.* 990D-991B. たとえば、 $1:\sqrt{2}$ はそのままでは比較不可能であるが、それぞれと同じ長さの比を一辺に持つ正方形を考えた場合、両者の面積は $1:2$ となり、 $\sqrt{2}$ は二倍の面積を持つ正方形の一辺として理解可能なものとなる。またこのような無理数の発見は、アカデメイアの最初からの一員であったテアイテトスによるものとされている (田中, 1974)。ただしギリシア人の幾何学では、ある種の大きさの積はたいがい別種の大きさとして表され、具体的な大きさや量と切り離されてはいなかった (たとえば、

長さの積が、平面や立体として表される)。これに対し、近世において、積をその一つ一つの因数と同様に線分と考え、次元の観念を一般化する解析幾何学を完成させるのが、近代哲学の祖、デカルト (1997, AT, VI, pp. 19-20) である。

注16) このように、代数学や幾何学の対象がアイデア界と現象界とを結ぶ媒介項となっていることは、Cornford (1932) や Reale (1990) も強調するところである。またヴェドベリ (1975) が指摘しているように、プラトンの代数学や幾何学の対象は、単なる抽象観念ではなく感覚的で現実的な存在をも含んでおり、このような感覚される領域に属する代数学や幾何学の対象は、プラトンのテキストにも数多く見出される。たとえば、『国家』第六巻の「線分の比喩」(R. VI 510D-E) から、思考される幾何学的対象と目に見える幾何学的対象は、原範型—似像の関係にあることが読みとれるのであって、目に見える幾何学的対象は、思考される幾何学的対象のエイコン (似像) や補助手段となっていることがわかる。このように、目に見える幾何学的対象や代数学的对象は、概念的にはソーマから区別されても存在的にはソーマと不可分であり、このことを示す用例は、プラトンのテキストにも数多く見出すことができる (*Men.* 74A-76D, *Cra.* 432A, *R.* VII 525D, 530B, *Phlb.* 56D-E, *Epin.* 991A)。

注17) このようなプラトンの考え方は、自然によって存在するものはそれ自らのうちにその運動および停止の原理〔始動因〕をもつ (*Ph.* 192b8-15) とするアリストテレス (1968a) の見解と鋭い対照をなしている。またプラトンは、上のような心魂動因説を、初期の『カルミデス』(*Chrm.* 156E) から、中期の『バイドロス』(*Phdr.* 245C-246A), 後期の『ティマイオス』(Ti. 34B-35A) を経て、最晩年の『法律』まで保持し続けている。

注18) プラトンの場合、ソーマ同士の運動変化はすべて、充実空間における粒子の接触や衝突によって引き起こされるのであり、他動の解釈には、こうした粒子による一連の運動過程を念頭におく必要があるだろう。詳細は Vlastos (1975) や Taylor (1972, p. 293) の見解に依拠した筆者の論文 (木庭, 2001a) を参照されたい。

注19) 「必然 ἀνάγκη」の主な意味とそれらの使用される箇所は、大体以下のようにまとめられるだろう。

- ① 「必要やむをえない (善との対応で)」 *R. I* 347C-O, II 358C, IV 493C, *Phd.* 97E など。
- ② 「自然学的な必然」 *Ti.* 47E-48A, 68E-69A, *Lg.* X 889B-C, XII 967A など。
- ③ 「論理的な必然」 *Thl.* 162E, *Ti.* 53D, 68B など。
- ④ 「必要なもの」 *R.* II 369B-D, 373A-374E, *Lg.* VI 782D-783A など。
- ⑤ 「運命」 *Prt.* 345D, *Lg.* V 741A など。
- ⑥ 「アナンケーの女神」 *R.* X 616C, 617B-D, 621A など。

なお「必然」の用例については『総索引』(岩波プラトン全集別巻)を参照した(田中・藤沢, 1978)。

注20) 同じく『パイドロス』(*Phdr.* 245C-246A)でも、ソーマの運動が休止の可能性を持つと言われている。

注21) ただし、田中の言う「合理性」とは、十八世紀末の合理主義的な必然論を、目的論的秩序のうちに取り込んだ形での「統一的合理性」を意味しているのであって、「非合理的な必然」とは、そのような目的論的秩序のうちにおさまりきらない「無理強いな必然性」のことである。また Strange (1985) は、アリストテレスの『動物部分論』(*PA.* 642a8-14)を典拠に、「必然」を「条件的必然」と「絶対的必然」に区別している。アリストテレスの「必然」については、注27)を参照されたい。

注22) また、このような「必然」は、本文に挙げた「人間の頭の製作 (*Ti.* 75B-C)」にもあるように、一度ある目的が設定されれば、それ以外には一挙両得を許さない単線的な運動であることがわかる。たとえば、人体の場合でも、ある薬を処方すると、同一の処方、決まって人体のある面には益になっても、別の面には明らかに害を及ぼすことが言われたり (*Lg.* I 636A)、優秀な競技者が定められた生活法を少しでもふみはずすと、ひどい大病を患うことがあると言われたりしている (*R.* III 404A)。

注23) 『ティマイオス』の「必然」については、そのほか Archer-Hind (1988) や Taylor (1972,

pp. 299-304), Cornford (1971) などともコメントしているが、かれらの場合、ソーマや「補助原因」、「迷動因」、「必然」、「偶然」などが、明確に区別されておらず、それらの相互関係も十分に把握されていない。

注24) Vlastos (1939, p. 394) は、悪しき心魂や無秩序な運動に関わるものとして「衝突 *προσιπτείν*」という語に着目している (*Ti.* 33A, 43B, 43C, 87A)。

注25) 林・笛木 (1994) は、プラトンの場合「ギュムナシアー *γυμνασία*」はギュムナスティケーの内容となる「鍛錬的運動」として理解され得るのであり、身体の善を作り出す技術としてのギュムナスティケーとは明確に区別される必要があるとしている。また、アリストテレスもギュムナスティケーはギュムナシアーを媒介して身体の善を作り出すという認識に立っていたことが、すでに佐藤 (1978) によって指摘されている。

注26) 同じく Skemp (1942) も、回転運動を四元素に可能な運動とし、四元素が、コーラーの振動による無秩序な直線運動とともに、知性の回転運動にも従うことを指摘している。また Vlastos (1939, pp. 383-385) は、時間の成立にも無秩序な直線運動に対する斉一的な円環運動の支配が認められるとしている。したがってソーマの運動性と時間性は、パラレルに捉えることができると言えるだろう。

注27) もしくは、アリストテレス研究者に言わせれば、アスペクトの違いといったことになるだろう。アリストテレスの「必然」については山田 (1989) と坂下 (1992) の研究を参照した。とりわけ坂下 (1992, p. 46) は、「一般的にいうと、同一の素材・物質が同時に複数のアスペクトを持つのであり、そのうちの或るアスペクトは構成体の目的によって必要とされ、そのほかのアスペクトは不必要とされる」とした上で、同一の物質に対して同時に「条件的必然性」と「絶対的必然性」が所属しうると指摘している。

注28) そのほか、感覚の分析に心身両面からのアプローチが必要なことは『ティマイオス』にも示唆されている (*Ti.* 43C, 61C-D)。さらにアリストテレス (1968b) も感覚の分析にあたってプラトンと同じ方法に則っている (*Sens.* 436b1-8)。

- 注29) ただし『ティマイオス』の記述から (*Ti.* 58A) 万有の心魂のはたらきは、宇宙全体としての粒子の渦動を維持するのに不可欠であることが読みとれる。また『パイドン』の心魂不死の証明においても、万物の休止が生成の循環的構造によって否定され、もし生成変化が反対のものへ向かう直線的なものであれば、万物は休止してしまうことが指摘されている (*Phd.* 72A-B)。すなわちこの『パイドン』の指摘は、先の運動性の考察でも見たように、心魂が直線的な生成に対して向きを変え、再び元へ戻る運動を円環的に作り出すということの裏づけにもなるのではないだろうか。
- 注30) このような悪の捉え方は『ティマイオス』の内部において一貫しており、人体の場合も、その諸々の構成要素が秩序から逸脱したり (*Ti.* 85C)、自然の理法に反した運動をしたりする (*Ti.* 83E) と、様々な病気が生じるとされている。そのほかにも悪や病気が様々な循環運動の逆転から生じるとされており、具体的には「嬰兒の心魂の描写 (*Ti.* 43A-44B)」や「二次的な組織の病気 (*Ti.* 82C-82E, 84A-C, 85D)」, 「心魂の病気 (*Ti.* 86E-87A)」などが挙げられる。
- 注31) Vlastos (1939, p. 394) も粒子の衝突に悪の原因を求める傾向にあり、かれは宇宙創造以前の混沌にある「振動  $\sigma\epsilon\iota\sigma\mu\acute{o}\varsigma$ 」に着目している。ただし宇宙創造以前の混沌はすでに「何らかの痕跡  $\iota\chi\nu\eta\ \acute{\alpha}\tau\tau\alpha$ 」を持っているわけであるから (*Ti.* 53B)、それだけで完全な悪と見なすことはできないだろう。さらに人間の身体の場合、上の振動は身体の世話にも利用されており、それはコーラーのはたらきのように、「同族関係に従って彷徨っている身体の色々な諸情態や部分を、相互に一定の配置へと秩序づけることで」身体に健康をもたらすとされているのである (プラトン, 1975a, *Ti.* 88D-88A)。
- 注32) Vlastos (1967) よれば、視覚や味覚における「尺度の一致  $\sigma\upsilon\mu\mu\epsilon\tau\epsilon\rho\iota\alpha$ 」は、粒子の大きさの「比率 ratio」ではなく、流体の密度の「一致 correspondence」に関わるとされている。
- 注33) 人間の身体が心魂やアイデアとの連関からそれ独自のあり方を呈するという事は、筆者の別の論文の中でも若干ふれられている (木庭, 2001b)。今後は、ソーマのより積極的なあり方

を、自然学や技術論、国家論といった具体的な文脈なかで論じていくことにしたい。

## 文 献

- Archer-Hind, R.D. (1888) *The Timaeus of Plato*. Macmillan and Co: New York, pp. 162-163, p.167.
- アリストテレス：出 隆訳 (1959) 形而上学 (上)。岩波書店：東京。
- アリストテレス：出 隆・岩崎允胤訳 (1968a) 自然学 (岩波アリストテレス全集3)。岩波書店：東京, pp. 44.
- アリストテレス：副島民雄訳 (1968b) 感覚と感覚されるものについて。自然学小論集 (岩波アリストテレス全集6)。岩波書店：東京, p. 182.
- Brisson, L. (1997) Plato's theory of sense perception in the *Timaeus*: How it works and what it means. In: Cleary, J.J. and Gurtler, G.M. (Eds.) (1999) *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy*. XIII. Koninklijke Brill NV: Leiden.
- ブロシャール：河野与一訳 (1929) プラトン哲学に於ける生成 哲学論叢 20, 岩波書店：東京。  
(Brochard, V. et Dauriac, L. (1900) *Le devenir dans la philosophie de Platon*. In: Delbos, V. (1912) *Étude de philosophie ancienne et de moderne*. Vrin: Paris, pp. 95-112.)
- Burnet, J. (Ed.) (1900-1907) *Platonis opera* (5 vols). Oxford: London.
- Cherniss, H.F. (1954) The sources of evil according to Plato. In: *Proceedings of the American Philosophical Society* 98: 23-30, repr. In: Tarán, L. (Ed.) (1977) *Harold Cherniss selected papers*. E. J. Brill: Leiden, pp. 253-260.
- キケロ：大西英文訳 (1999) 弁論家について (キケロ選集7)。岩波書店：東京, p. 342.
- Cornford, F.M. (1932) Mathematics and dialectic in the *Republic* VI-VII. In: Allen, R.E. (Ed.) (1965) *Studies in Plato's metaphysics*. Routledge & Kegan Paul: London, p. 63.
- Cornford, F.M. (1971) *Plato's cosmology*. Routledge & Kegan Paul: London, pp. 162-177.
- デカルト：谷川多佳子訳 (1997) 方法序説。岩波書店：東京, pp. 30-31, p. 112 (第二部, 訳註19)。  
(C. Adam et P. Tannery (Pb.) (1964-1974) *Euvres*

- de Descartes. J. Vrin: Paris.)
- ディオゲネス＝ラエルティオス：加来彰俊訳（1984）ギリシア哲学者列伝（上）．岩波書店：東京，p. 277.
- 林 英彰・笹木 寛（1994）プラトンにおけるギムナスティケーおよび同系派生語の用例分析．*体育原理研究* 25：27-28.
- Jackson, H. (1882) Plato's later theory of Ideas. *The Journal of Philology* X (20): 253-298.
- Johansen, T. (2000) Body, soul, and tripartition in Plato's *Timaeus*. In: Sedley, D. (Ed.) (2000) *Oxford Studies in Ancient Philosophy*. XIX, Oxford University Press: New York: 87-111.
- Joubaud, C. (1991) *Le corps humain dan la philosophie Platonicienne: Étude à partir du Timée*. Vrin: Paris.
- 金松賢諒（1976）プラトンの神学と宇宙論．法蔵館：京都，p. 116.
- 木庭康樹（2001a）プラトン哲学における身体論—自然学的考察を中心に—．*体育科学修士*：筑波大学，pp. 50-52.
- 木庭康樹（2001b）プラトン哲学における身体論序説—体育哲学への方法論的アプローチ—．*身体運動文化研究* 8 (1)：1-15.
- 桑子敏雄（1999）解説．アリストテレス：桑子敏雄訳（1999）心とは何か．講談社：東京，pp. 202-205.
- Morrow, G.R. (1950) Necessity and persuasion in Plato's *Timaeus*. In: Allen, R.E. (Ed.) (1965) *Studies in Plato's metaphysics*. Routledge & Kegan Paul: London, pp. 432-434.
- プラトン：種山恭子訳（1975a）ティマイオス（岩波プラトン全集12）．岩波書店：東京．
- プラトン：森 進一ほか訳（1976a）法律（岩波プラトン全集13）．岩波書店：東京．
- プラトン：田中美知太郎訳（1975b）ピレボス（岩波プラトン全集4）．岩波書店：東京．
- プラトン：田中美知太郎訳（1976b）ソピステス（岩波プラトン全集3）．岩波書店：東京．
- Proclus: Festugière, A.J. (traduction et notes) (1967) *Commentaire sur le Timée III*. Librairie Philosophique J. Vrin: Paris, pp. 156-157.
- 坂下浩司（1992）アリストテレスの目的論における物質の必然．*古代哲学研究* 24：38-48.
- 佐藤臣彦（1978）アリストテレスの体育技術論．*新体育* 48 (4)：318.
- 佐藤臣彦（1999）身体論序説—アリストテレスを中心に—．文学博士：筑波大学，p. 19.
- Reale, G. (1990) *A history of ancient philosophy*. II. State University of New York Press: Albany, p. 112.
- Rosen, S. (1995) *Commentary on Sallis*. In: Cleary, J.J. and Wians, W.C. (Eds.) (1997) *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy*. XI, University Press of America: Boston: 175.
- Sallis, J. (1995) *Timaeus' discourse on the Χώρα*. In: Cleary, J.J. and Wians, W.C. (Eds.) (1997) *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy*. XI, University Press of America: Boston: 165.
- Sayre, K.M. (1998) The role of the *Timaeus* in the development of Plato's late ontology. *Ancient Philosophy* 18: 103-113.
- シンプリキオス：内山勝利ほか訳（1997）アリストテレス「自然学」注解．ディールス・クランツ：内山勝利ほか訳（1997）ソクラテス以前の哲学者断片集（第II分冊）．岩波書店：東京，p. 148. 〈Diels, H. und Kranz, W. (Hrsg.) (1984-1985) *Die Fragmente der Vorsokratiker* (2 vols, Wortindex). Weidmann: Germany.〉
- Skemp, J.B. (1942) The theory of motion in Plato's later dialogues. Cambridge University Press: Great Britain, p. 86.
- Strange, S.K. (1985) The double explanation in the *Timaeus*. *Ancient Philosophy* 5: 412-413.
- 鈴木照雄（1982）ギリシア思想論攷．二玄社：東京．
- 田中美知太郎（1969）空間と場所—ギリシア的思考の一面—（田中美知太郎全集5巻）．筑摩書房：東京，pp. 471-485.
- 田中美知太郎（1981）プラトンII 哲学（1）．岩波書店：東京．
- 田中美知太郎（1974）『テアイテトス』解説（岩波プラトン全集2）．岩波書店：東京，pp. 434-436.
- 田中美知太郎・藤沢令夫編（1975-1978）プラトン全集（全15巻，別巻1）．岩波書店：東京．
- 田中美知太郎・藤沢令夫編（1978）総索引（岩波プラトン全集別巻）．岩波書店：東京，pp. 431-435.
- Taylor, A.E. (1972) *A commentary on Plato's*

- Timaeus. Oxford: London.
- 土屋陸廣 (1991) プラトンにおける悪と物体の問題—『ティマイオス』の宇宙生成論をめぐって—。倫理学年報 40 : 19-34.
- Vlastos, G. (1967) Plato's supposed theory of irregular atomic figures. In: Vlastos, G. (Ed.) (1973) Platonic studies. Princeton University Press: U.S.A, p. 372.
- Vlastos, G. (1975) Plato's universe. University of Washington Press: Seattle, pp. 76-77.
- Vlastos, G. (1939) The disorderly motion in the Timaeus. In: Allen, R.E. (Ed.) (1965) Studies in Plato's metaphysics. Routledge & Kegan Paul: London, pp. 379-399.
- ヴェドベリ：山川偉也訳 (1975) プラトンの数理哲学。法律文化社，京都，pp. 59-60. (Wedberg, A. (1955) Plato's philosophy of mathematics. Almqvist & Wiksell: New York, p. 47.)
- 山田道夫 (1989) アリストテレスにおける目的と必然。古代哲学研究 21 : 38-45.
- Zeller, E. (1889) Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung. II. Vierte Auflage: Leipzig, SS. 721-723.

(平成14年2月25日受付)  
 (平成15年3月27日受理)